



57 我が園に 梅の花散る ひさかたの 天より雪の 流れ来るかも
 (巻五・八二二)

原文 和何則能尔 宇米能波奈知流 比佐可多能 阿米欲里由吉能 那何列久流加
 母

意味 わが家の庭に梅の花が散っている。天から雪が流れて来るのだろうか。

解説 天平二(七三〇)年正月一三日、大伴旅人が館に大宰府管下の官僚を集めて、梅花の下で宴を催した時の歌である。異国情緒をたたえる植物を囲み、異国の習慣に倣つての宴は、海外の玄関口に当たたる大宰府にはふさわしい集いであつたという。宴席歌のため、旅人を賀している社交の歌であり、拙い歌はないが傑作もないようである。

落花を落雪に見立てるのは漢詩に多く、『懐風藻』旅人作にも「梅雪残岸に乱れ、煙霞早春に接く」とある。しかし、「見立て」が和歌の修辭法として一般的に用いられるのは『古今和歌集』になつてからである。「雪の流れ来る」も、「流風・流露・流雪」などの漢詩句の応用である。

この歌は大久保広行(『万葉の歌人と作品』)が「憶良が散る棟の花と涙を結びつけた、『日本挽歌』の第四反歌(巻五・七九八)をも意識しながら、直接的には先の憶良歌に応えて現時の心境を象徴的に歌い上げた一首と解したい」としながらも、この裏の心理的贈答も宴席での「文雅の遊び」かもしれないという。

創作のポイント

和可所の尔 梅農盤那遅る 久方の 未免与利ゆ支能 可れ来る可毛
 各行の文字群の数を少なくして、字幅の大小に大きな差をつけてみました。第二行の「方の」に密度感を与え、周囲に疎を配して求心力をもたせています。そのため、大きな二つの余白は、一層の広がりをもっています。脈々と降下する行の中で、しなやかな心身の働きが豊かな文字の表情を創出します
 第二行の右回転と、第二行の左回転、第二行と第三行の寄り添う姿を考慮しました。